リベラルアーツの社会的役割を見つめて

―2004年度大学教育学会課題研究集会報告―

佐々木　一也

昨年12月4日（土）と5日（日）の両日にわたり2004年度大学教育学会課題研究集会が，本学8号館1階8101教室をメイン会場として開催された。

大学教育学会とは

大学教育学会は1979年「一般教育学会」として設立され，大学における一般教育課程の理念の確認や実質的教育の充実などを目指す大学教員の実践と理論の交流の場として機能してきた。この学会の特色は，大学教育の具体的実践に重点を置いていることであり，実際に大学教育の現場で行われていることを学問的に検討しながら，現場にフィードバックし，個々の授業や大学運営に実質的な影響を与えることを目指していることにある。本学でも旧一般教育部が機関会員として加盟し，その活動に参加してきた。1991年のいわゆる大学設置基準の大綱化を経て，日本中の大学で組織改編やカリキュラム改革が行われていった状況下で，1995年3月末日をもって本学でも一般教育部が廃止されることになった。一新された一般教育課程の理念を持って全学共通カリキュラム（全カリ）が組織としてスタートし，本学はリベラルアーツの伝統を発展させる新たな段階に入った。一般教育学会でもそれと時期を同じくして，一般教育の理念や教育そのものがいわゆる専門教育課程を含んだ大学教育全般の問題として捉え直されるべきだ，との声が高まるにいたった。そして1997年にその名称を「大学教育学会」へと変更し，学会活動として新たな領域を開拓することになった。昨年は学会創立25周年に当たり，本学院の寺崎昌男先生が中心になって25年史（『あたらしい教養教育をめざして―大学教育学会25年の歩み―未来への提言』大学教育学会25年史編集委員会編・東信堂）が編纂された。

大学教育学会は年2回の集会を開催する。春に学会大会，秋に課題研究集会である。学会大会は他の学会の例に倣い，個人発表，シンポジウム，講演などを多彩に組み合わせ，金曜夕刻の理事会に始まり，土曜日曜両日をフルに使用して行われる。それに対し，課

題研究集会は，大学教育学会の定める研究課題を中心に，それを全員で討議するシンポジウム３本のみでもって行われる。土曜日の午後，日曜の午前，日曜の午後と３つの時間帯にそれぞれ１つずつのシンポジウムが行われる。

現在，大学教育学会が認定する学会の研究課題は２つある。１つは「初年次・導入教育」であり，もう１つが「教養教育の評価」である。それに加えて，今回は立教からの提案として「大学改革における教員と職員の連携」をシンポジウムのテーマとした。

さらに，昨年は会場を提供した立教学院の創立130周年にも当たり，学院の記念行事にも組み入れていただくことになった。それゆえに課題研究集会開催のために大学からの補助金のほかに学院からも補助金をいただくことができた。この場を借りて改めて感謝の意を表したい。学院の創立130周年記念行事でもあるため，シンポジウムⅠの「初年次・導入教育」のテーマに「立教における一環連携教育の問題」を組み入れることにした。

今回のシンポジウム企画

今回の課題研究集会の企画委員長が寺崎先生，実行委員長が私，という布陣で準備に入り，以下のようなプログラム構成となった。

統一テーマ「大学の教育力とその社会的役割」

ややもすると外圧によって進められている現在の大学改革の現状を直視し，大学として果たすべき社会的役割を自律的に考究し，自ら社会に対してそれを発信する責務を今一度確認することをテーマに掲げた。

12月4日土曜日午後

基調講演

「現代教養教育の原点と貢献―社会が求めるものと大学が提供すべきもの―」

柴田翔氏（東京大学名誉教授・共立女子大学教授）

シンポジウムⅠ

「高校教育の多様化の進行と初年次教育・導入教育の課題」

杉森共和氏（東京都立世田谷泉高等学校）

渡谷壽氏（立教新座高等学校）

井上義和氏（関西国際大学）

濱名篤氏（関西国際大学）

12月5日日曜日午前

シンポジウムⅡ

「教学支援と大学改革― FD，SDからPD（Professional Development）へ―」

西田邦明氏（立教大学教務部事務部長）

江口正樹氏（新潟大学専門職員）

山本眞一氏（筑波大学）

関根秀和氏（大阪女学院大学）

12月5日日曜日午後

シンポジウムⅢ

「教養教育の社会的役割と評価―『高

等教育のグランドデザイン」論議を見据えて―」

天野郁夫氏（国立大学財務・経営センター）

後藤邦夫氏（NPO法人学術研究ネット）

羽田貴史氏（広島大学）

山岸駿介氏（財団法人日本私学教育研究所）

以上である。司会には学会理事を中心に，今回の課題研究集会の企画委員を務めた学会員が当たったが，それぞれのシンポジウムにⅠが私自身，Ⅱに今田晶子さん，Ⅲに寺崎先生が加わり，立教色を出した構成になった。

基調講演

芥川賞小説『されどわれらが日々―』（1964年受賞）によって知られ，団塊の世代前後には特別の感慨を持たれる元東京大学文学部長の独文学者柴田翔氏の基調講演は，氏の学生時代の学び方，大学で教えるようになってからの経験に始まり，現代の大学が抱える問題を見事に切り取って見せ，聞く者をうならせるものだった。エリート大学とそうでない大学両方の教育経験に基づき，「ほどほどに受験する」若者が多くなった今，彼らに有意義な場を与えることの重要性が説かれた。それは，ご自身の専門であるドイツ文学の学問性と教養性との，あるいは社会的存在者としての大学運営者と研究者との葛藤に基づいて，「ほどほど受験組」に対する教育こそが，ひいては，エリート層をも巻き込んで，人間の内面世界を見つめ，他者との関係の再認識を通じて，自己認識を深めることにつながり，単なる「会社人」でなく，本当の「社会人」を輩出することに通じる，ということだった。そのためには大学はそれぞれの多様な個性を前面に出して，自らの「大学の旗印」のもとに「この指とまれ」と積極的に呼びかけられる自律性を持たなければならない，ということでもある。我が立教大学の社会的付託はどこにあるのか，そして，どのように社会に対して訴えかけてゆくべきなのか，深く考えさせられる講演だった。

シンポジウムⅠ

引き続いて行われたシンポジウムⅠでは，本学院の渡谷壽氏から立教の一環連携教育実現への道筋や連携教育がスムーズに流れるための高校側の工夫について紹介され，都立世田谷泉高校からは，それと対極的に，必ずしも学力を前提としない高校入学者に，高校卒業者としての内容と自信を与える工夫や努力が紹介された。それを受けて，関西国際大学から，初年次・導入教育をどのように行って高校と大学の教育を連接させるか，という問題意識のもとに，特に家族で初めて大学に入学した学生（大学第一世代）と，親の世代にすでに大学教育を受けた人のいる学

生（大学第二世代）とで，大学適応や学習進度において違いが見えるかどうかの研究発表が行われた。

立教のような大学との連携関係を持つ高校からの学生は，世田谷泉高校タイプの学校出身者に比べれば，大学第一世代は相対的に多くない。一般に第二世代は学習面でも対人関係面でも大学適応には不利な要素が多いと思われがちなのだが，第一世代でも成績上位グループでは大学全般にうまく適応できている。また，第二世代には高校時の成績より大学入学後の人間関係の成否により，その後の成績が左右されることも明らかにされた。これらのことは，多様な高校教育のどれを経由しても，大学で人間関係をうまく構築できれば，学習を含めて，大学に適応しやすいことを意味する。それ故に，一環連携教育では，大学での生活習慣や新しい人間関係を構築する力を与えることが一つのヒントになるように思われた。

シンポジウムⅡ

翌日の朝行われたシンポジウムⅡは，今回立教が提案したテーマで行われた。立教の全カリをはじめとする教学上の改革あるいは新システム構築のプロセスで，教員と職員が密接に協力あるいは協働してそれを成し遂げてきた，という経験を我々は持っている。それを全国レベルで紹介し，他大学の実態などと比較対照しながら，大学運営の理念と絡めて，より力を蓄えた大学教職員集団を構築するための手がかりを求めよう，というのが，このシンポジウムのねらいである。

立教大学教務部事務部長の西田邦明氏から，全カリをはじめとする教学改革や教務部の組織改革が大学をより効率的に活性化し，大学本来の力を発揮するためのものだったことが，全国の多くの優れた大学職員がその薫陶に接したが最近惜しくも急逝された孫福弘氏の大学組織論に基づいて整理され，紹介された。また，新潟大学事務局からは，国立大学が独立行政法人化する中で「個性輝く大学」「国際競争力の強化」「教養教育の充実」のスローガンの下，幾多の教育研究上の具体的目標達成のため，「全学教育機構」が設置されたプロセスなどが紹介された。そして，文部科学省の方針に従って学長や学部長の強いリーダーシップを確立するために，トップダウンで教員と職員の連携が進められつつある現状が報告された。それに対し，筑波大学の山本氏からは，現状の大学機能の多様化により，大学職員にも①大学を変化させる時代状況全体への目配り，②学生の求めるサービス向上の内容を的確に認知できること，③新しい事務分野への飽くなき好奇心の，3つが求められることが語られた。

これをもとに議論が進められたが，この問題に関してはこの学会でもほとんど初めて扱ったテーマでもあり，双

方の事例紹介に終わった感も否めない。しかし，このシンポジウムと立教の教職員渾然一体となった改革エネルギーは，将来の日本の大学に大学スタッフ（教員と職員という区別なく大学を支える同志）という考え方を定着させるための礎になるだろうと思われる。

シンポジウムⅢ

本課題研究集会最後の催し物であるこのシンポジウムは，「教養教育の評価」という大学教育学会研究課題を踏まえて設定された。しかし，現在文部科学省中央教育審議会大学分科会において，日本の大学像に大きな影響を与えるかもしれない大枠（「高等教育のグランドデザイン」）が検討されていることを受け，教養教育の社会的役割を評価する中で，グランドデザイン論議にも教養教育推進論の側から逆影響を与えよう，という意図もねらいには含まれていた。

このシンポジウムは司会者の一人であり，かつ本課題研究集会企画委員長でもある本学院の寺崎昌男先生の主導の下で進められた。大学分科会の側からは天野郁夫氏が，ユニバーサル化した日本の大学において，大学間の機能分化が進んでゆくであろう現状の下で，それを前提に多様な大学教育が推進され，「総合的教養教育型」や「専門教育完成型」などに分化する見通しが語られた。しかし，それは教養教育の軽視を意味するものでなく，学問全体にまたがる見識を養う教養教育を担う教員には「高い力量が求められる」とされた。だがその一方で，学士課程教育を3年で修了し，大学院との連携を可能にせよ，との考え方も示されており，中教審大学分科会の議論の行方は予断を許さない。それに対し，大学教育学会で長年活動してきた教員の立場からは後藤邦夫氏が，大学の量的拡大による大学の多様化は，貧富の拡大再生産の段階に入った現状の資本主義下では所得格差と直結する知的格差の表れであり，単なる多様化でなく「格差の拡大」である，と反論した。中教審の高等教育政策は現状での社会的格差を追認し，その大勢維持のために奉仕しかねない。むしろ教養教育はそのような大勢に流されない，新たな知的社会的パラダイムを創出するための基礎体力として重視され，評価されるべきだ，という趣旨の発題だったと，私は理解した。広島大学の羽田貴史氏は，ドイツやイギリスの大学改革論を参照しながら，エリート学生をイメージした教養観はもはや有効ではないが，教養が死滅したと断ずるのは早計だと論じる。人生を切り開くのに高度な知的技能を求められる現代社会に生きているにもかかわらず，批判的学習能力が身につかないまま大学に入学する学生に，どのようにして自らの人生を切り開く力を身につけさせるか，という観点から教養教育を見直すべきであるこ

とを主張した。

多様な立場や議論が百出し，白熱したシンポジウムとなったが，教養教育をどうすべきか，その評価としてどのような教養教育が優れたものとされるか，については，もちろん簡単に合意の得られるものではない。このシンポジウムでも寺崎先生のご尽力によって，このようなテーマと講師陣をそろえることができたが，内容的に煮詰まることは残念ながらなかった。しかし，教養教育が単に漠然とした「教養」を身につけさせるためのものだったり，「専門科目の下請け」だったりするものでないことは，参加者全員に理解されただろう。教養教育を巡る問題は，高等教育がユニバーサル化されることが要請されるほど，高度に知識が集約された社会に我々が生きていることから発しているのである。それが社会的格差を前提とせず，社会的活力を維持する方向に社会を誘導し，同時にそこに生きる個々人の生活を物心ともに豊かにするものであって欲しい。それが大学教育に携わり，教養教育を大切に思う我々に共通の願いであろう。その願いを胸に秘めて，このシンポジウムを最後に閉幕した今回の課題研究集会の参加者たちは，それぞれの現場に散っていったと思う次第である。

全体を振り返って

今回の課題研究集会が立教で開かれた意義は大きいと思われる。それは，立教学院130周年記念行事として行われたことにも表れているように，「立教の立教による立教のための研究集会」だったからである。建学の精神にリベラルアーツ教育を掲げる我が立教は，これまで全カリを始め，多くの教育改革を，現場の教員の経験と見識と，それを運営する現場の職員の経験と見識とを織り上げ，細部の意見を大切にする故に全体としては不格好な部分もないとは言えないにしろ，見事に実現してきた。この課題研究集会にしても，大学教育学会に関わる立教関係者が知恵を出し合い，協力し合って，テーマ設定も当日の運営も実現したのだった。内容も運営も，実に立教的と言える個性あふれる研究集会になった。学会本部からも高い評価を得ることができた。立教だからこそできた課題研究集会だった，と誇れると思う。

お陰様で通例の課題研究集会から想定された参加人数（150名程度）を大幅に上回る279名もの参加者を得ることができた。懇親会も大盛会で，二次会会場も溢れるほどだった。開催にこぎつけるまでには，学内での会場確保のために各方面にお願いし，ご苦労をおかけした。最終的に大学で行われることになったものの，一時は池袋中高校舎の拝借をも検討させていただいたほどだ。当日には，日曜にもかかわらず，無理にお願いして江戸川乱歩邸の幻影城（蔵）を公開していただき（関係者には日曜出勤をお願いすることに

なってしまった。ここに改めて感謝申し上げる。)，参加者の参観に供し好評であった。チャペルではオルガンも演奏された。

今回機会を得て，『大学教育研究フォーラム』に報告を書かせていただくことができた。ここに記録することによって，立教のリベラルアーツの営みに次につながるエネルギーを与えられれば，望外の喜びである。この課題研究集会開催の経験を糧に，立教大学の教員職員が一体となって，大学の未来が見えにくくなっている現在，立教建学の初心を忘れず，大学教育および研究の本道を堂々と歩んでゆきたいと念じる。最後にこの場をお借りして，多大なるご支援を頂いた学院長，総長，学院関係者のみなさま，そしてとりわけ私の無理な願いをねばり強く実現にこぎつけて下さった全カリ事務室のスタッフの皆様方に深甚なる感謝と敬意を捧げ，このささやかな記録を閉じることとしたい。

ささき　かずや
(本学文学部教授)